

## 大会レポート

全国高等学校体育連盟テニス専門部常任委員 茂野高德

第48回全国選抜高校テニス大会が3月20日から26日まで、福岡県博多の森テニス競技場およびオクゼン不動産テニスコートで開催された。2複3単で争う団体戦ではチームの誇りを胸に高校テニス日本一の座を懸けて熾烈な争いが展開された。また、個人戦では全米オープンジュニアの出場権獲得を目指して熱い戦いが繰り広げられた。



### 3月20日 開会式

青天の下、博多の森テニス競技場のセンターコートにて開会式が行われた。前年度優勝校である女子・大商学園(大阪)と男子・湘南工大附(神奈川)を先頭に、男女各48校の選手たちが堂々の入場行進を披露した。華やかな雰囲気の中にも、翌日から始まる真剣勝負を前に、選手たちの表情は引き締まっていた。選手宣誓は磐田東(静岡)の太田乃愛さんと防府(山口)の大野正太郎さんが、憧れの舞台に立てる喜びを感じつつ、最後の1球まで諦めず全身全霊でプレーすることを誓った。



## 団体戦

3月21日

団体戦1回戦が行われた。初戦から各コートで火花を散らす接戦が展開された。中でもセンターコートで行われた東京学館新潟(新潟)と清風(大阪)の試合は、5時間半におよぶ大接戦となり、3勝2敗で東京学館新潟が勝利した。



3月22日

団体戦2回戦が行われ、シード校が登場した。実力校が順当に勝ち上がる一方で、手に汗握る接戦も多く見られた。初出場の磐田東(静岡)は1回戦を勝ち上がるも、2回戦はシード校の白鵬女子(神奈川)に敗れた。



3月23日

3回戦及び準々決勝が行われ、ベスト4が決定した。



3月24日

準決勝が行われた。男子は四日市工(三重)が第1シードの重圧を跳ね返し、名経大市邨(愛知)を3勝1敗で、第2シードの関西(岡山)は湘南工大附(神奈川)を3勝0敗で下し、決勝は実力校同士の対決となった。女子は相生学院(兵庫)が第1シードの野田学園(山口)を3勝0敗で、大会連覇を目指す大商学園(大阪)は近畿大会決勝で敗れていた第2シードの神戸野田(兵庫)を3勝2敗で下し、決勝は近畿勢対決となった。

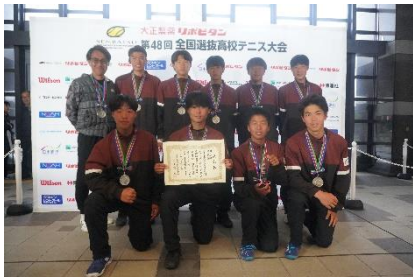




3月25日

雨のため男女ともに室内コートで決勝戦が行われた。トップ2シードの対戦となった男子決勝は、勢いに乗る関西(岡山)が3回目の優勝をねらう四日市工(三重)を3勝1敗で下し、初の日本一に輝いた。近畿勢対決となった女子決勝は相生学院(兵庫)が前年度優勝の大商学園(大阪)を3勝1敗で下し、2年ぶり5度目の日本一に輝いた。





## 個人戦

個人戦は団体戦に出場した学校の登録 No1 の選手に各都道府県推薦選手と福岡県特別枠推薦選手を加えて争われた。団体戦に出場している選手は団体戦が終了したあと、順次個人戦トーナメントに組み込まれる。



3月22日

個人戦1回戦がオクゼン不動産テニスコートで行われた。

3月23日

団体戦で敗退した登録 No1 の選手を加え、個人戦2～3回戦がオクゼン不動産テニスコートで行われた。

3月24日

博多の森テニス競技場に会場を移し、4～5回戦が行われた。

3月25日

6回戦及び準々決勝が行われた。団体戦決勝を戦った各校エースを加え準決勝に進む男女各4名が絞られた。



3月26日

準決勝及び決勝戦が行われた。女子の準決勝は団体戦優勝・相生学院(兵庫)の北岡美空が沖縄尚学(沖縄)の伊東来春を8-1で、大商学園(大阪)の窪田結衣が野田学園(山口)の島田菜帆を8-2で破り決勝へと駒を進めた。女子の決勝戦は団体戦と対戦となった。前日行われた団体戦ではエース対決を大商学園の窪田結衣が制したものの、チームとしては相生学園が勝っていた。個人戦では窪田結衣が団体戦の雪辱を晴らし、6-3、6-1のストレートで栄冠を勝ち取った。試合後のスピーチでは「この大会で優勝することを目標にこれまで取り組んできたので優勝できて嬉しい。USオープンジュニアでは楽しみながらプレーしたい。」と意気込みを語った。

男子の準決勝は湘南工大附(神奈川)の櫻井義浩が、団体戦優勝・関西(岡山)の稗田光を8-4で、名経大市邨(愛知)の鈴木志翔が四日市工(三重)の小野倫太郎を8-3で破り決勝へと駒を進めた。決勝では櫻井義浩がフットワークを活かした速いテンポのテニスを展開し、粘る鈴木志翔を6-3、6-3のストレートで下し優勝した。優勝後のスピーチでは「今大会で優勝できるとしていなかっただけに喜びが大きい。USオープンジュニアでは1つでも多く勝ちたい」と世界での活躍を誓った。





### 結びに

晴れ渡った空のもと、今大会が滞りなく幕を閉じることができた背景には、スポンサー各社による支援に加え、福岡県のテニス部顧問の先生方や高校生たちが一丸となって運営を支え抜いたという確かな事実がある。中でも、照りつける日差しを浴びながら公正なジャッジを貫き通した高校生審判たちの存在は、今大会の誇りと言っていだろう。選手と同じように一球一球に魂を込め、極限の緊張感の中でジャッジし続けた誠実さが、数々の名勝負をより価値あるものへと昇華させたことを忘れてはならない。

コートで戦った選手と、それを同じ熱量で支え抜いた高校生たちの情熱が溶け合い、第48回全国選抜高校テニス大会は大きな成功を収めた。この大会が描き出した光景は、日本テニス界の明るい未来を豊かに予感させるものとなった。

